



炬火を掲げていざ謳う

No.78



我らの泉鳥取

2024年5月27日（月）

編集 泉鳥取高等学校閉校記念事業実行委員会

大阪府大阪市緑ヶ丘1-1-10

<https://www.osaka-c.ed.jp/custom91.html>

もっときちんと生徒と向き合いたい（古資料発見）

10学級要求(1980年)

閉校に向けて、校内の様々な場所の整理を行っていますが、学校草創期に大規模校化を食い止めるための要求資料が大職員室のロッカーから出てきました。校長・教頭や全教職員を挙げて1学年10学級以下にしよう、府教育委員会にお願いした時期があり、「10学級要求」と呼んでいた動きの資料です。作成はおそらく1980（昭和55）年度と思われます。全て手書き、更半紙印刷で、手で触ると崩れそうに風化した本に、当時の泉鳥取高等学校が抱えていた問題が見えてきました。

この冊子は『再度10学級要求』という冊子で、2代目八木幸治校長、初代吉岡光雄教頭をはじめ、60名の教職員が府教育委員会に対して、泉鳥取高校の現状と自分たちの思いを訴えた97ページにも及ぶ冊子となっています。そのうち八木校長は

「本校は校長以下全職員が、生徒のひとりひとりの学習権、進路を保障するために日夜精励しています。泉鳥取高校を永久に立派な学校として残して行く為には、生徒ひとりひとりの将来を保障してやらなければなりません。その為には本校では種々の条件から考えて1学年10学級が限度であります。

泉鳥取高校の現状をよくご理解いただき、その行政責任を真剣に自覚されて、十分な措置をされますよう切に要望いたします」

と書かれています。また英語のある先生は

「初めて教職につき、勤めたのが新設1年目の年だったわけですが、その後今に至るまで、学校が完成していく有様を目の当たりにしてきました。その間の本校の推移には、目覚ましいものがありますが、生徒指導上の困難点は、解消されていくどころか、大規模校というまとまりのなかで、かえって著しくなっているように感じます。（中略）大幅な学力差の生徒を抱える現状では、授業時間内にすべての生徒に学力を保障するのは、到底不可能なことです。このため、ほとんどの教科が放課後か始業前の時間を割いて補講（復習）と講習（進学希望者対象）を行っています。（中略）個別指導という形で教えざるを得ません。ところが、このように教師が大切な教材研究やクラブ指導の時間をさいて教えても、昨年（昭和54年度：編者註）など原級留置者が1年で30人、2年で27人も出るという実態です。私自身、英語の担当ですが、年を経るごとに教えることの難しさを実感するばかりです」

そのほかにも新設校における進路保障のための企業訪問、生徒指導上の家庭訪問の多さなどなど、当時の難しさがつづられています。同様の訴えは10周年記念誌27頁にも書かれています。

この時期、府立高校は多くの学校で12学級以上の定員となっており、この問題は泉鳥取だけの問題ではありません。しかし、この資料を読むと、大規模校の問題点が改めて浮き彫りになります。またこの時期は、中学校が荒れていた時期でもあり、『ピーバップ・ハイスクール』が流行った時期でもあります。生活指導については、多くの課題を多くの学校が抱えた時期でもありました。

平均年齢29歳の若き教職員が、「もっと生徒と向き合いたい」という切々たる思いを持っていることがひしひしと伝わる資料です。

なお、1991（平成3）年度に9クラス募集、1993（平成5）年度の10クラス募集が最後になり、ようやく二けたクラス募集の時代が終わりました。



大職員室ロッカーより発見